

チヨコレートキヤッスル  
2018年9月公演

# 空腹に愛液

決定稿

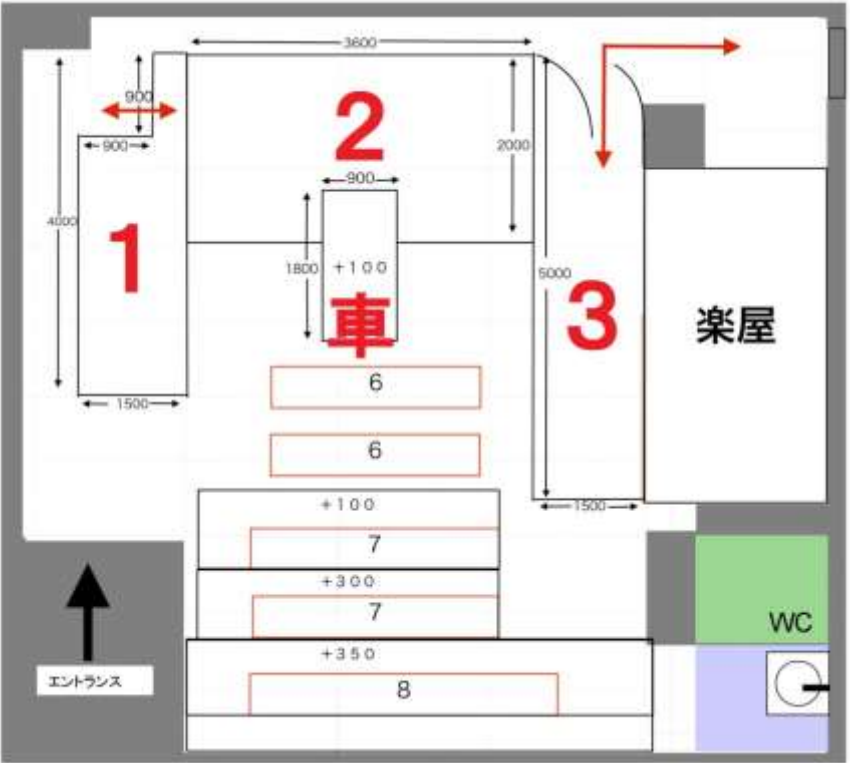
## 人物

カエリ（17）

現在でいう上海の集落に住む。  
性的なことへの興味が強い。  
疑い深く、用心深い。人見知り。インドア派。

ロアル（19）

現在でいう筑紫平野の集落に住む。  
知識欲が強い。  
社交的で明るい性格。体を動かすことも好き。



(1) カエリの上海での生活での食事や、ソフィアの人家、サンクト・ペテルブルクの天文台で使用予定。物が雑多な空間。

(2) カエリの上海での生活での睡眠や蜜事、ホワイトボードでの議論、ビシュケク、パリの宗教施設で使用予定。フラットな空間。

(3) カエリの上海での生活でのアウトドアイベントや、パリ到着、ジュノーで使用予定。文化的・都会的な雰囲気のある空間。

全体的に電飾を撒き散らす。  
プラネタリウムの配備(?)

## ○カエリの集落（夜）

S、イーブの襲来

S、流覚

S、集落の人たちの悲鳴

人々の声 「これは……！」

人々の声 「イーブ……！」

人々の声 「これが……イーブ……！」

人々の声 「逃げろ！」

人々の声 「無理だ！ 逃げられるもんか！」

人々の声 「姿も見えないし音も聞こえないんだぞ！」

人々の声 「イーブなんだぞ！」

人々の声 「ついにやって来たんだ……！」

人々の声 「どこに逃げたって、逃げ切れるわけない！」

人々の声 「どうせみんな死ぬんだ……！」

人々の声 「逃げてみないと分からないだろ！」

人々の声 「逃げ！ あっちだ、走れ！」

S、悲鳴。

人々の声 「カエリ、カエリはどこ」

人々の声 「アイツは今、大連に初めての」

全ての音、CO。

× × ×

L、点く。

星空。赤い星が大きく輝いている。

星が瞬いている。

カエリ、現れる。

カエリ

「ただいまー！ つとわたしが初めてのお使いで初めて上海を出て、初めて大連に行ったその帰り、わたしの集落は……もぬけの殻だった！ お兄ちゃんもお父さんもお母さんも、友達のステラもカウルも、

バアトも、だれ一人いなくなっていた！　ワアオ！　これは驚いた：  
：初めての経験。初めて尽くしだ。どうしようどうしようどうしよう  
：いや、待って、そもそもどうということだろうか？　なんで誰もい  
ないんだ？　上海南部のこの集落、普段はみんなで賑やかだ。畑仕事  
に釣り仕事、他の集落との電信関係エトセトラ。仕事はいっぱい人も  
いっぱい、いつも賑やかにここにこ……なこの集落がどういうわけか、  
誰も、いない！」

カエリ、上を見る。

カエリ

「そうだ！　今は夜じゃないか！　みんな寝てるに決まってる。夜だ  
夜だ夜なんだ、なんてったって辺りは暗い。空にはほら！　わたしの  
大好きな赤い星、なんだあれは、何て名前なのか知らないけど、あの  
星がキラキラ赤くきらめいている！　それが示すことはすなわち、今  
は夜であるということだ！　ならば人気がなく当然、みんな明日に  
は起きだすだろう、働き出すであろう。わたしはそれを待っただけだ。  
今日はこのままグッドナイト」

カエリ、寝る。

カエリ、起きる。

カエリ

「ハッとわたしは気付いて起きる！　いやいやいやいや！　そんなそ  
んな今は西暦 8037 年。人気がなく当然だって？　寝ぼけてたのか、  
夢みたいなこと言っちゃいけない。流れを、感じないのである。生  
きとし生けるものから発せられる流れ。それを感じる感覚、流覚。そ  
いつがさつきから全然感じられない。これはつまり……本当にここが  
人がいないってことだ」

カエリ

「ああ」

カエリ

「ああ」

カエリ

「人がいない。おー。なんだこれは……。え、なんだこれ。えと、  
皆さん、街に帰ってきたら街から人が誰もいなくなってたことあり  
ますか……。？　あります？　ない？　ないですか。ないですよ  
ね！？　困ったな……。どうしよう……。いや、こんな起こり得な

いことが、起こってしまつて、わたしも、混乱してるんです。ごめんなさい。取り乱しました。で、わたしはそのときどうしたかというと」

カエリ、布団を引つ張つて来て

カエリ

「結局寝ました。だって他にすることないから。わたしが何かしたところで誰かがひよっこり帰つて来る、なんてことは起こり得ないような気がしたので、今度はホントにグッドナイト(寝る)。人は誰もいなくなつても、名も知らぬ赤い星よ、おまえはいつも輝いてわたしを照らしてくれるな……おやすみ。明日になったらみんないますように」

## ○ロアルの集落(朝)

福岡・筑紫野市

リュックサックを背負つたロアルが出てくる。

ロアル

「ただいま！　つとわたしが実地調査で初めてヨハネスブルクを訪れた帰り、わたしの集落は……もぬけの殻だった！　お父さんもお母さんも、だれ一人いなくなつていた！　ワアオ！　これは驚いた。が、わたしは慌てなかつた。わたしはなんとなくこの事態が、いつかは訪れるであろうということを知つていた。イーブだ。イーブの仕業である。わたしは知っている。イーブが、人類を駆逐しているということ。そして、イーブに対して我々は成す術がないということ」

ロアル、リュックサックから手記を取り出して読んでいる。

## ○カエリの集落(朝)

翌朝。

カエリ

「グッドモーニング、朝だ！（起きる）　お父さん！　お母さん！　ステラ、カウル、バート！　いない。全然グッドじゃないモーニングだ。バツモーニン！」

カエリ 「あつ、とわたしは唐突に思い出した。いや、思い出したというほどのことじゃないのだ。むしろ当たり前すぎて、意識することもなかったのかもしれない。イーブ。地球外生命体を示すこの語は、わたしたちの世界では特定の生命体を示す」

### ○ロアルの集落

ロアル、手記を読みながら

ロアル 「わたしたちを駆逐する、見えざる敵。音もなく現れ、姿も見えない。しかし、流れを感じる。わたしたちは敵の流れを感じることができる。だから敵は【生命体】であると分かる。流れは、生きとし生けるものが発し、わたしたちは流覚をもつてして流れを感知することができる。敵は、天より前触れなく現れ、わたしたちを消してしまう。ひゅつと。あつという間に。誰の血も流さずに。消されたものがどうなったのか、誰も知らない。帰ってきた者もない」

### ○カエリの集落（朝）

カエリ 「イーブがついに、ついに、わたしの住む集落にもやって来てしまったんだ……わたしが大連に行っている間に」

### ○ロアルの集落

ロアル、手記を読みながら

ロアル 「イーブとの、言語、文字、記号、ジェスチャー、電気信号、流れを通じたコミュニケーションはいずれも不可能である。それゆえ、わたしたちはイーブに対して成す術がない。同じ【生命体】として、イーブの方が人類より高度な文明を築いている」

ロアル、手記を閉じて出発の準備。トートバッグを持って来る。  
出発（ハケる）。

### ○カエリの集落

カエリが釣り道具（竿と網と保冷箱）を持っている。  
釣り。

カエリ 「釣るぞ！」

カエリ、竿を投げ込む。

カエリ

「つと わたしは釣りを始める。集落のみんなはなくなってしまったけれど、わたしは生きているから、生きて行かないといけないよ。ね？」

## ○ロアルの旅路

S、車の音

ロアル声

「わたしは仲間を探した。生きている人間はいないのか、イーブが捕まえ損ねた人間はいないのか。おーい、おーい。誰かいませんか！ 生きている人はいませんか！ 九州、いない。四国、いない。本州、いない。北海道、いない……。ひとの流れを全く感じられない。誰もいない。日本の人は皆、イーブに連れ去られてしまったらしい。イーブは文字通り、日本人を殲滅したのだ。おーい、おーい。わたしは海を渡ることを決める」

S、潜水艇

## ○カエリの集落（夕夜）

カエリ

「ピクリとも来ない」

カエリ、次第に退屈になり、そのうち、うたた寝をしてしまう。

S、ガサゴソという音

S、流覚

ロアル声

「うそ、うそうそうそうそうそ……！ ひとがいる……？」



ロアルがやって来る。大きめのリュックサックに、トートバッグ。

ロアル 「あの」

ロアル、荷物を下ろす。  
カエリに触ろうとするも、躊躇う。

ロアル 「竿を指して」竿、これ、引いてる」

カエリは起きない。

ロアル 「逃げちゃうよ」

竿はぐいぐいと引かれている。

ロアル 「ええ〜」

ロアル、竿を引く。

ロアル 「うわ、デカいな」

ロアル、悪戦苦闘する。  
カエリ、目を覚ます。  
カエリの横で、ロアルが魚を釣っている。  
カエリ、びっくりして後ずさる。  
カエリ、網を手にしてロアルの頭に掛ける。

カエリ 「捕まえた！」

ロアル 「うわあ！」

カエリ 「誰！」

ロアル 「ちよちよちよちよ」

カエリ 「人?!」

ロアル 「ちよつとちよつと」

カエリ 「誰だ! いつ、どっから、どうやって、え」

ロアル 「待って待って待って」

カエリ 「え、なんで……どうやって、どっから、どうやって、誰、なんで

……。どっから!?」  
ロアル 「いいからこの状態を」

カエリ、辺りを見回す。

カエリ 「おまえ、イーブか？」  
ロアル 「違う、違う、あの、網、網が」  
カエリ 「嘘! だって、どっから……」  
ロアル 「網!!!!」

ロアル、自分で網を外す。

カエリ 「うわあ!」  
ロアル 「うわあ! じゃねえよ! こっちのセリフだよ!」  
カエリ 「え……」  
ロアル 「ああ、びっくりした」  
カエリ 「魚……」  
ロアル 「魚じゃないよ!」  
カエリ 「じゃなくて(竿を指す)」  
ロアル 「? あああああ!」

ロアル、急いで竿を上げるも、エサは外れている。

ロアル 「ああああああ! 逃げちゃった」  
カエリ 「ああああ……」

カエリ、釣り竿をロアルから取り上げ、切なそうに見つめる。

カエリ 「(ロアルを見て) ってか、あなた誰!」  
ロアル 「わたし?」  
カエリ 「あなた、ここの人じゃないでしょ」  
ロアル 「日本人」  
カエリ 「日本……?」  
ロアル 「海を渡ってきたんだ」  
カエリ 「上海まで?」  
ロアル 「そう」

カエリ 「泳いで？」  
ロアル 「いやいや、死ぬわ」

ロアル 「バギーで。途中、釜山と済州に寄って」  
カエリ 「どこ」  
ロアル 「なにが」  
カエリ 「釜山とか、済州で」  
ロアル 「あゝ。あっち」

ロアル、海の向こうを指さす。

カエリ 「どこどこ」  
ロアル 「えと、あっちがわたしの来た福岡で」  
カエリ 「うん」  
ロアル 「あそこに、済州島があって、んでそのもうちよい奥が、朝鮮半島で」

カエリ 「全然見えないんだけど」  
ロアル 「見えるわけないでしょ」  
カエリ 「誰と」  
ロアル 「ひとりで」  
カエリ 「ひとり！？（笑）」  
ロアル 「うん。集落の仲間はみんな、消されちゃったから」

ロアル 「イーブに」  
カエリ 「イーブ」

ロアル、ゆっくり頷く。

カエリ 「イーブって、あの？」  
ロアル 「そう」  
カエリ 「世界中で出現している、あの？」  
ロアル 「そう。世界中に出現し、人間を駆逐している、あのイーブだ」  
カエリ 「そう……」  
ロアル 「うむ」

ロアル 「わたしはロアル。さっきも言ったとおり、日本の福岡ってところ

から来た。きみは？」

カエリ 「わたしは……カエリ」

ロアル、ニコツと笑って

ロアル 「よろしくね、カエリ（手を差し出す）」

カエリ、手を差し伸べるのを躊躇って

カエリ 「よろしく……？」

ロアル 「わたし、今日からあなたと一緒に住むから」

カエリ 「うん」

カエリ 「え！」

ロアル 「だから、よろしく」

カエリ 「なんだこいつ！」

L、暗転

× × ×

ロアルがリコーダーを演奏している。そこそこ上手い。

カエリは本を読んでいる。

カエリはロアルの演奏が（読書の気が散るので）気になっている。

カエリ 「ちよつと！」

ロアル 「ん？」

カエリ 「気が散るんだけど」

ロアル 「そんなこと言われても」

カエリ 「なんなの、それは」

ロアル 「知らない？ これ」

カエリ 「知らないから聞いているの」

ロアル、笑う。

カエリ 「なに」

ロアル 「リコーダーだよ？ 知らない」  
カエリ 「……聞いたことはある」  
ロアル 「聞いたことあるって、使ったことないの？」  
カエリ 「ない」  
ロアル 「ふっ」  
カエリ 「はあ？ うざ」  
ロアル 「すぐ『うざ』とか言う」  
カエリ 「どうせ福岡だけのローカル楽器でしょ？ 上海にはそんなものありません」  
ロアル 「あると思うけど……」  
カエリ 「見たことない」  
ロアル 「いや、でもあると思う」  
カエリ 「もういい！ そんなあるないの水掛け論、しても仕方ない」  
ロアル 「水掛け論で」

ロアル、立ち上がりリコーダーをリュックに戻すため、リュックの方へ行く。  
リュックの横にはトートバッグが置いてある。

カエリ 「そのさ、手提げには何が入っているの」  
ロアル 「ああ。(トートからノートを出して) これ？」  
カエリ 「は？ なに……ただのノートじゃん」  
ロアル 「何を言うか。(ペラペラめくって見せて) 日記だよ」  
カエリ 「日記！ (立ち上がって) 見せて！」  
ロアル 「いやだよ」  
カエリ 「ええええええ」  
ロアル 「誰が日記なんか見せるかよ」  
カエリ 「いいじゃん、減るもんじゃないし」  
ロアル 「減るもんじゃないことと見せることの因果関係が分からないんだけど」  
カエリ 「わ、めんどくさっ」  
ロアル 「あと、トートな」  
カエリ 「は」  
ロアル 「手提げじゃなくて」  
カエリ 「へっ」  
ロアル 「手提げじゃなくて、トートバッグ！」

カエリ 「あっ！ トート！」

ロアル 「そう」

カエリ 「(笑って) トートからノート」

ロアル 「は」

カエリ 「ノートからノート」

カエリ、ひとりでウケている。

ロアル 「なんだこいつ」

カエリ 「ノートからノートって (ひとしきりウケる)」

ロアル 「こわっ。ご飯にしょ」

ロアル、立ち上がって備蓄庫へ向かう。

カエリ 「ご飯！」

ロアル声 「切り替え早！ こわっ」

カエリ 「お腹ぺこぺこ&りゅうちえる！」

ロアル声 「なに？」

カエリ 「&りんく！ なんでもない！」

カエリはテーブルを持って来るなど、ご機嫌に食事の準備をする。  
ロアル、二人分の食事を持ってやって来る。

ロアル 「はいはいはい！ お待たせ」

カエリ 「早い！ わあ。美味しそう！」

ロアル 「材料はいつもと変わらないけどね」

カエリ 「でもありがとう」

ロアル 「どういたしまして。食べようか」

カエリとロアル、テーブルに着く。

カエ・ロア 「いただきます」

食べる。

ロアル 「どう？」

カエリ 「普通」

× × ×

し、星空。赤く輝くひとときわ大きな星がある。  
カエリ、食器を下げる。

ロアル 「もう寝るね」

カエリ、戻って来る。

カエリ 「もう？」

ロアル 「うん」

カエリ 「えい、ジョルカやろうよ。ジョルカ！」

ロアル 「明日な」

カエリ 「えい、今日がいい、今がいい」

ロアル 「今日は、やだ。寝る」

カエリ 「今日がいいよお、退屈退屈退屈」

ロアル、寝室に向かい

ロアル 「今日は疲れた。寝る！」

ロアル、去る。

カエリ 「ごめんね」

ロアル声 「ねむい」

カエリ 「お休み」

カエリ、寝そべって夜空を見上げる。

カエリ 「あくあ。退屈だ、退屈」

ひとときわ大きく輝く赤い星がある。

カエリ 「赤い。赤いなおまえ」

カエリ、お腹をさする。

カエリ、ロアルの去った方を見て

カエリ 「わたしたちは、もうこの世に二人だけなのかなあ？」

カエリ 「みんな、イーブに殺されちゃったのかなあ。福岡の人も、釜山の人も、済州の人も、……上海の人も。もう、人間はどこにもいないのかな」

カエリ 「わたしの流覚じゃ分からないだけ？ ロアルは、分かるのかな」

カエリ 「わたしたちが、地球最後の人類、なのかな」

カエリ 「ね、ロアル」

カエリ、寝返りを打つ。

ロアル、入って来る。静かにカエリを見ている。

カエリ 「さみしいよ。ステラもカウルもバートも、みんないなくなっちゃったよ。ロアルだけだよ」

「ども」

「！」

ロアル 「ちよつと喉乾いて」

ロアル、備蓄庫へ行く。

カエリ、慌てている。

カエリ 「いるならいるって言ってよ！！ めっちゃ恥ずかしいんだけど」

ロアル、牛乳を持って戻って来る。テーブルに着く。

カエリ 「めっちゃ恥ずかしいんだけど！！」

ロアル 「みんながいなくなっちゃって、寂しかったんでしょ」

「……」

ロアル 「カエリも一人でするんだね」



カエリ 「うるさい」

ロアル、カエリをじっと見つめて

カエリ 「そうだよ！ 悪い？」

ロアル 「うん。わたしもそうだったから」

カエリ 「ロアルも？」

ロアル 「うん。みんながいなくなっちゃったんだから、寂しいよ、そりゃ」

カエリ 「うん」

ロアル 「わたしも、カエリとおんなじ」

カエリ 「え？」

ロアル、カエリを後ろから抱きしめる。

カエリ 「ロアル！？ ちよ、ちよっと……」

ロアル 「柔らかい」

カエリ 「ひっ。くすぐりたい」

カエリ、笑う。

カエリ 「えっえっえっ」

ロアル 「いいでしょ」

カエリ 「恥ずかしいよお」

ロアル 「なんでよ、わたしたち以外誰もいないんだから」

カエリ 「そうかもだけどお……」

ロアル、カエリの下半身に手を伸ばす。

カエリ 「ちよちよちよちよっとお」

ロアル 「ひひゃあ」

カエリ 「なによ」

ロアル 「湿ってるよ」

カエリ 「やめて」

ロアル 「脱がなきゃ」

ロアル、カエリのパンツを下ろそうとする。

カエリ 「脱ぐの？」  
ロアル 「もちろん」

カエリ、ロアルをじっと見つめて  
ロアル、脱がせようとする。

カエリ 「やだ！ 自分で脱ぐ」  
ロアル 「あ、そう」

カエリ、パンツを脱いでその辺に投げる。  
ロアル、カエリに優しく口づける。何回かフレンチキス。  
ロアル、カエリをキスしながら倒す。  
ロアル、カエリに接近していき、口づける。何回も、次第に激しく。  
カエリ、ロアルの口に舌を入れる。

ロアル 「！」

深くキスをする。  
ロアル、キスをしたままカエリの下半身を触る。

カエリ 「ふわああ」  
ロアル 「すごいぬるぬるしてる」  
カエリ 「いちいち言わないで」  
ロアル 「ぬるぬる」  
カエリ 「サイアク！」  
ロアル 「ごめん」

ロアル、もう一方の手で、カエリの体を触る。

カエリ 「はあああっん……」

カエリ 「ああっ……あ……」

カエリ 「んんんっ、あっ……」

ロアル、カエリの下半身を舐めようとする。

カエリ 「ちよつと！」

カエリ、脚を閉じる。

ロアル 「わたし、うまいから（グーサイン）」

カエリ 「なにうまいって！」

ロアル 「いいから」

ロアル、カエリの脚を開こうとする。

カエリは抵抗する。

ロアル 「好きなの」

カエリ 「ええええ。恥ずかしい。汚いし」

ロアル 「汚くないよ」

カエリ、脚を開く。

カエリ 「汚いよお」

ロアル、カエリの下半身を舐める。

カエリ 「やだ、じゃあわたしも」

ロアル 「ええ。無理すんなよ」

カエリ 「うるさい」

カエリとロアル、組んず解れつし、69の形になる。  
カエリとロアルが絶頂を迎えそうになる。

カエリ 「あつあつ、ああ……ああ……いく、いきそう」

ロアル 「わたしも、気持ちい、だめ……ああああああ」

カエリ 「ロアル、一緒に、ね」

ロアル 「うん」

カエリ 「だめ、だめええええ、あつつ、ああああああああ」

ロアル 「いっっちゃう、……いっっちゃう、ああ……ああ、あつうう」



ロアル 「カエリ！ 伝えたいことがあるの！」

カエリ、ロアルの手を握って

ロアル 「なに！ フラグはやめて！」

カエリ 「すっごい気持ちよかったよ」

ロアル 「何言ってるんだ、こんな時に」

カエリ 「最後に気持ちよくなれて、良かった」

ロアル 「フラグを立てない！」

カエリ 「わたしたち最後の」

S、イーブが遠ざかる。

ロアル 「あれ……？」

カエリとロアル、辺りを見回す。

S、流覚が弱まる

カエリ 「消えた」

ロアル 「消えたね、イーブ」

カエリ 「うん……。行っちゃった、よね？」

ロアル 「行っちゃってるね」

カエリ 「ドユコト」

ロアル 「これって……」

ロアル 「わたしたち、助かったのかな？」

カエリ 「そういうことなのかな」

ロアル 「そんなことあるのかな……？」

カエリ 「あるのかな」

カエリとロアル、見つめ合い

ロアル 「助かった……（安堵）」

カエリ 「やった……。やったー（歓喜） ちょっとロアル」

ロアル 「いや、もう、死ぬかと思った」

カエリ 「うん」

ロアル 「わたしたち、生きてるんだよね？」

カエリ 「たぶん」  
ロアル 「ちよつと、ぶつてみて」  
カエリ 「え」  
ロアル 「ぶつて（自分のほっぺを指す）」  
カエリ 「いいの？」  
ロアル 「うん」  
カエリ 「なんで」  
ロアル 「だつて嘘みたいなんだもん。イーブがこんな近くに来て助かるなんて。だから」  
カエリ 「いいのね？」  
ロアル 「うん」  
カエリ 「分かった」

カエリ、唐突にぶつ。

ロアル 「いつてえ！ いった！ は？ めっちゃ急」  
カエリ 「どう、痛かった？」  
ロアル 「予告しろ！」  
カエリ 「ええええ」  
ロアル 「いった、え、めっちゃくちゃ痛い」  
カエリ 「良かったじゃん。間違いなく現実」  
ロアル 「なんで予告しないの？」  
カエリ 「ぶつていったの自分じゃん」  
ロアル 「予告はしろ！ イーブか！」  
カエリ 「（ハケながら）意味わかんない」  
ロアル 「（ハケながら）予告なしでやって来るって、イーブか」  
カエリ 「そだね」  
ロアル 「は？」  
カエリ 「そだね」

カエリとロアル、ハケる。

### ○同（日替わり）

カエリ、うろろうろ。

カエリ 「イーブとは何だろう」

カエリ 「イーブはいったいどこから来て、どこへわたしたちを連れ去るの  
だろう」

カエリ 「いったいイーブはなぜ、わたしたちを消し去るのか。そこに目的  
はあるのか。はたまた愉快的な行いなのだろうか……。謎は深い」

カエリ 「わたしたちはずっとこのままここで……。あるいは、イーブたちに  
殺されてしまうのだろうか」

ロアルが埃っぽい黒板を持ってやって来る。

黒板には「イーブ(点線)」「人間」が描かれており、さらに「理由」  
「駆逐人数」「出現頻度」「滞在時間」「出現間隔」と書かれている。

ロアル 「(咳き込む) すんごい奥にあった」

カエリ 「やあやあ、黒板。レトロだね。わたしMC！ あなた書記」

ロアル 「いやいや、そんな大袈裟なものじゃないでしょう」

カエリ 「(無視して) こんばんは、全力カエリタイムズのお時間です。シャ  
バダバダシャバダバダシャバダバダ This is going!

ロアル 「聞いてないし」

カエリ 「(無視して) 昨日の件を受けて、いま一度イーブについて考えたい  
と思います」

ロアル 「はい、そうですね」

カエリ 「つてかナニコレ！」

ロアル 「ああ、人間とイーブ」

カエリ 「イーブ?! なんで点線」

ロアル 「見えないし、音も聞こえないから」

カエリ 「なるなる」

ロアル 「で、(流れを描きながら) わたしたちは、流れによってのみイーブ  
を感知できますね」

カエリ 「そう、流れ。音もしないし姿も見えない。デッカい流れだったね  
……」

ロアル 「ね。(人間を消しながら) そしてイーブは人間を消しますね」

カエリ 「消す、つて、殺しているのかな……?」

ロアル 「それは分からない。分かんないから、その可能性はある」

ロアル、「殺す？」と書く。

カエリ 『理由』っていうのは」

ロアル 「イーブがなぜ人を消すのか」

カエリ 「それは」

ロアル 「分かりません。なぜならイーブとの通信にまだ成功していないから。イーブが何をもつてこんなことをするのかは謎」

ロアル、「理由」のところに「？」と書く。

カエリ 「次、駆逐人数！」

ロアル 「はい」

カエリ 「とは、なんですか？」

ロアル 「一回の襲来で、どれくらいの人間が消されるのか、です」

カエリ 「なるなる」

ロアル 「どれくらいの人数が消されると思いますか？」

カエリ 「……想像もつかない」

ロアル 「(書きながら) 数千〜数万と言われています」

カエリ 「そんなに!？」

ロアル 「うん」

カエリ 「ひええええ」

ロアル 「出現頻度ですが」

カエリ 「出現頻度！」

ロアル 「じつはこれ、世界中で下がってきているんです」

カエリ 「下がってる? つまり?」

ロアル 「はい、昔は1月に一度、2月に一度とかの頻度で現れていたのが、ここ3年くらいは、実は5〜6カ月に一度とかに減ってきているんです」

カエリ 「そうなんですネ! 知りませんでした」

ロアル 「はい」

ロアル、「出現頻度」のところに「↓」と書く。

カエリ 「下がっています!」

ロアル 「でも逆に、(指して) 一回の滞在時間は長くなっているんです」



カエリ 「へえ……」  
ロアル 「ここ10年で、1度の出現での滞在時間は、平均14%伸びている  
うです」

ロアル、「滞在時間」のところに「↑」と書く。

カエリ 「上がっています！」  
ロアル 「そして最後に出現間隔ですが」  
カエリ 「出現間隔です」  
ロアル 「あのですね、イーブの出現間隔なんです、これ、絶対に言わな  
いでくださいよ、実は、次はいついつに現れる、あるいは、次はど  
こどこに現れる、という予想は全く立たないのです。全てアトラン  
ダムなんだそうです」

カエリ 「たしかに、急に現れますもんね」  
ロアル 「次はどこに現れるか、いつ現れるかは、全く不規則なんだそう  
です」

カエリ 「へえ、そうなんだ」  
ロアル 「うん」  
カエリ 「よく知ってるね」  
ロアル 「だろ？」  
カエリ 「あんま上海から出たことないから、他の地域のこと分からない」  
ロアル 「はっ（鼻で笑う）」

ロアル、「出現間隔」のところに「ランダム」と書く。

カエリ 「え〜つまり」

カエリ、ホワイトボードを見て

カエリ 「えイーブとは、流覚でしか知覚できず、一度に数千〜数万人を消  
すか殺すかするやつらで、理由は不明。ここ数年で出現頻度が少な  
くなる一方、滞在時間は伸びていて、え〜そして、ランダムな感覚  
で出現する。そんなやつらなんです」

ロアル 「そんなやつらです」  
カエリ 「消された人たちはどうなるのでしょうか」  
ロアル 「それね」

カエリ 「そして、わたしは本当に疑問なんです、なぜ昨日わたしたちは、消されずに済んだのでしょうか」

ロアル 「ね」

カエリ 「ロアルも？」

ロアル 「イーブから逃げられる、なんて聞いたことがない」

カエリ 「そうなの？」

ロアル 「一度感じたら最後、みんな死ぬんだよ……だから記録も残らないんだ」

カエリ 「……？」

ロアル 「あのさ、人類は本当にわたしたちだけなのかな？」

カエリ 「……え？」

ロアル 「たぶん、イーブのせいで人類が減っているのは間違いないと思うんだ」

カエリ 「そうだね」

ロアル 「これ」

ロアル、ホワイトボードの「出現頻度」の「↓」と「滞在時間」の「↑」を丸で囲む。

ロアル 「これが示すのはさ、地球上の人類の抹殺はある程度終わっていて、わたしたちみたいなの取りこぼしを、虱潰しに探している、ってことなんじゃないかな？」

カエリ 「？」

ロアル 「きつとね、イーブと雖も地球を丸々搜索することはできないから、きつと範囲を区切って搜索しているんだよ。今回は東アジアのこの地域とか、今回は南ヨーロッパのこの地域……とかさ」

カエリ 「なるなる？」

ロアル 「それがかつては、各地域の人類を殲滅するために、頻繁に出現していた（出現頻度を指す）」

カエリ 「はあ」

ロアル 「でも、あらかた殲滅が終わった今、各地域の取りこぼしを細かく地道に探している。だから一回の搜索に時間をかけているんじゃないかな（滞在時間を指す）」

カエリ 「なるなる！」

ロアル 「逆に考えれば、まだ各地に取りこぼされた人が生きている可能性はあるんじゃないかな？」

カエリ 「！ 確かに……」  
ロアル 「現にわたしがいた」  
カエリ 「わたしもいる」  
ロアル 「ほかの地域に誰かいてもおかしくないよね？」

ロアル 「行く？ 行っちゃう？ 仲間見つけに」  
カエリ 「ん」  
ロアル 「そんで組んじゃう？ 組んじゃう？」  
カエリ 「何を」  
ロアル 「徒党」  
カエリ 「ん」  
ロアル 「で、倒しちゃう！？ イーブ」

ロアル、シャドーボクシングをする。

ロアル 「ほら、シュツシュツシュツ。イーブシュツシュツシュツ」  
カエリ 「んんんん」  
ロアル 「(とめて) なに？ つれないナ」  
カエリ 「倒せるの？」  
ロアル 「分かんない」  
カエリ 「流れしか分からない相手をも？」  
ロアル 「どうなんだろうね」  
カエリ 「だいたいどうやって探すのさ、仲間」  
ロアル 「そりゃもちろん」  
カエリ 「なに」  
ロアル 「(車を指して) バギーで」  
カエリ 「！ 地道！」

### ○ロアルが運転する車・内

車に乗り込んでいるカエリとロアル。  
ロアルが運転している。  
車の後方には大きい荷物。

ロアル 「いやあ、風が気持ちいいねえ」  
カエリ 「そうね」

ロアル 「日差しが眩しい」

ロアル、サングラスを着ける。

カエリ 「ねえ、本当に人なんか見つかるの？」

ロアル 「それは神のみぞ知る」

カエリ 「イーブだっていつ襲ってくるか分からない」

ロアル 「神のみぞ知る」

カエリ 「呑気」

ロアル 「だって死ぬときは一緒でしょ？」

カエリ 「(鼻で笑う) 分っかんないよ。わたしは尻尾巻いて逃げるかも」

ロアル 「(笑って) そんな。逆ならあるだろうけど」

カエリ 「なに、逆って」

ロアル 「わたしが逃げる」

カエリ 「！ ……そういうこと言うんだ」

ロアル 「なに」

カエリ 「そういうこと言うんだ！」

ロアル 「なんだよ」

カエリ 「あっそ！」

ロアル 「逃げないよ」

カエリ 「フーン」

ロアル 「怒るなよ」

カエリ 「別にいゝ」

ロアル 「だって、イーブ来たらどうせ逃げられないじゃん」

カエリ 「あ？」

ロアル 「ちよつと逃げただけじゃ、逃げられないでしょ。イーブからは」

カエリ 「そうだね！」

ロアル 「何怒ってんだよ」

カエリ 「知らん」

ロアル 「(カエリの様子を窺い) なに？」

カエリ、ロアルの耳元に空気を吹き込む。

ロアル 「ふおおおおお、なんしょつと！」

カエリ 「ああ？」

ロアル 「運転中じゃあ！」

S、車が爆走する

カエリ 「ちよつと、安全運転で走ってよ！」  
ロアル 「(カエリを見て) 分かっているよ！」  
カエリ 「あ!!!! 前、前、前!!!!」  
ロアル 「(前を見て) ん? あああああああああ!!!!」  
カエリ 「ああああああああ!!!!」

### ○中央アジアの集落(ビシュケク)(夜)

S、車が止まる。  
空には星が輝く。  
カエリとロアル、車から降りて

カエリ 「着いた？」  
ロアル 「とうるか、見切りをつけた」  
カエリ 「ほお、もう真つ暗だもんね」  
ロアル 「あと、5時間で日の出だよ」  
カエリ 「もう寝なきや！」  
ロアル 「上海の時間で、だけど」  
カエリ 「や、つてかここどこ！」  
ロアル 「ビシュケク」  
カエリ 「どこだよ」  
ロアル 「キルギスの首都」  
カエリ 「どこだよ」  
ロアル 「ええ」  
カエリ 「キルギスどこだよ」  
ロアル 「タジキスタンとカザフスタンの間」  
カエリ 「どこどこじゃそれは! 分からん！」  
ロアル 「え、もうちよつと西行けばウズベキスタン、トルクメニスタン」  
カエリ 「どこどこだよ」  
ロアル 「ええ。世界地理を勉強しなさいよ」  
カエリ 「はい……。や、そんなことより! 人探すんでしょ!」  
ロアル 「たしかに」  
カエリ 「行くよ!」  
ロアル 「え、今から？」

カエリ 「今からじゃないの？」  
ロアル 「今からなの？」  
カエリ 「違うの!？」  
ロアル 「一日運転したんだよ。明日にしよう」  
カエリ 「そうか」  
ロアル 「寝かせてくれ」  
カエリ 「そうか」  
ロアル 「眠いよ」  
カエリ 「分かったよ」

ロアル、車に向かう。  
ロアル、車の座席から二人分の布団を取って来る。

ロアル 「ほれ、布団(渡す)」  
カエリ 「(受け取って匂いを嗅ぐ) おえっ うう、ばっちい」  
ロアル 「文句言わない」  
カエリ 「うう」

ロアル、寝っ転がる。

ロアル 「はあああ、眠い眠い」  
カエリ 「そこで寝るの!？」  
ロアル 「どこで寝るんだよ」  
カエリ 「野蛮」  
ロアル 「襲ってくる人なんていないよ」  
カエリ 「それは分からないじゃない」

カエリ 「車の中で寝たら？」  
ロアル 「やだよ。エコノミークラス症候群になる」  
カエリ 「何それ」  
ロアル 「体、バッキバキになるの(布団を被る)。おやすみ!」  
カエリ 「……」

カエリ、渋々布団を持って、寝る。  
ロアルの隣に寝る。  
カエリ、空に輝く星を見つめている。

ひとときわ大きく輝く赤い星。  
ロアルも眠ってはいない。  
ロアルはカエリに背を向けている。  
カエリ、手を伸ばしてみる。

ロアル 「何してるの」  
カエリ 「ロアル。寝てないの？」  
ロアル 「ん」  
カエリ 「寝付けないの？」  
ロアル 「まあ。何してるの」  
カエリ 「わたしも、寝付けない」  
ロアル 「ふうん」  
カエリ 「赤い」  
ロアル 「ん？」  
カエリ 「あれ」

カエリ、赤い星を指さす。  
ロアルも仰向けになって空を見る。

ロアル 「ああ」  
カエリ 「赤くて大きい」  
ロアル 「EOP!-88」  
カエリ 「あ？」  
ロアル 「つて言うんだよ、その星」  
カエリ 「そうなの？」  
ロアル 「そう」  
カエリ 「へえ〜！ EOP……K」  
ロアル 「I。EOP!-88」  
カエリ 「EOP!-88」  
ロアル 「そう」  
カエリ 「覚えた。これもみんな知ってること？」  
ロアル 「う〜ん、日本では。たぶん」  
カエリ 「へえ。全然知らなかったなあ。あんなに綺麗な星なのに」  
ロアル 「綺麗、か」  
カエリ 「綺麗でしょ。赤くて、大きくて。吸い込まれそう」  
ロアル 「……」

ロアル、寝返りを打つ。カエリに背を向ける。

ロアル  
「寝るよ」

カエリ  
「うん」

カエリ  
「ねえ」

ロアル  
「うん？」

カエリ  
「そっちに行ってもいい？」

ロアル  
「……いいよ」

カエリ  
「アリガト」

カエリ、ロアルにくつつく。

カエリ、ロアルにエロいことを仕掛ける（耳を噛む）。

ロアル  
「こら」

カエリ  
「ごめん」

ロアル  
「寝るんじゃないの」

カエリ  
「うんん」

カエリ、エロいことを仕掛ける。

ロアル  
「ちよつと」

カエリ  
「しないの？」

ロアル  
「まじ？」

カエリ  
「しないの？」

ロアル  
「うっそ」

カエリ、ぐいぐい仕掛ける。

ロアル、抵抗しない（抵抗するのも面倒くさい）。

布団を被ってエロいこと。ロアルも何やかんやで感じてしまう。

S、流覚

S、イーブ襲来

ロアル、布団から出てくる。



ロアル 「また!？」  
カエリ 「イーブ！」  
ロアル 「うわわわわわわわ! どうすんだ! (てんてこ舞い)」  
カエリ 「どうするって、どうしようもないよ (布団を被る)」  
ロアル 「死にたくない」  
カエリ 「わたしだって死にたくない」  
ロアル 「こんな恥ずかしい格好で」  
カエリ 「恥ずかしくないよ」  
ロアル 「なんでよ」  
カエリ 「誰も見ないから」  
ロアル 「分かんないじゃん」

カエリ、ロアルに向かって

カエリ 「いつまで顔出してるの、危ないよ!」  
ロアル 「変わらないでしょ!」  
カエリ 「分かんないじゃん!」  
ロアル 「見てるわけじゃないんだから」  
カエリ 「でも気休めくらいには効くかもしれないじゃん。だから早く戻ってよ、ロアル!」

ロアル、布団に戻って

ロアル 「(小声で) どうか通り過ぎてくださいどうか通り過ぎてください」  
カエリとロアル、布団の中で抱き合う。  
カエリ、ロアルの下半身に手を伸ばす。

ロアル 「ちよっと」  
カエリ 「濡れてる。こんな状況なのに」  
ロアル 「うるさい」

S、イーブが遠ざかる音

カエリ 「いっっちゃった……?」

カエリとロアル、布団から体を出して

カエリ 「いない。流れ」

ロアル 「感じないね」

カエリ 「まただね」

ロアル 「また行っちゃったね」

カエリ 「こんなことあるのかな」

ロアル 「ね」

カエリ 「どういうことだろう？」

ロアル 「分かんないよ」

カエリ 「だってイーブから逃げられるなんて」

ロアル 「でも実際助かってる」

カエリ 「……もしかしてわたしたち、実はもうとっくに捕まってるんじゃないかなあ」

ロアル 「じゃあここはどこ？」

カエリ 「実はイーブは、わたしたちを捕獲して殺してるんじゃないかと、どこか別の時代に移してる……とか」

ロアル 「ええ〜」

カエリとロアル、空を見上げる。

カエリ 「イーブとはなんだろう」

ロアル 「さあ」

カエリ 「続きしよ？」

ロアル 「ええ〜」

空にはひととき大きく輝く赤い星。

カエリとロアル、再び布団に潜る。

### ○東ヨーロッパの集落（ソフィア）・家中（夕）

カエリとロアルが入ってくる。

カエリは懐中電灯を持っている。

家の中は暗い。

たくさんの汚れたずた袋やら本やらがある。

カエリ 「お邪魔します」  
ロアル 「失礼します」  
カエリ 「誰かいますか」  
ロアル 「いないっしょ」

カエリとロアルは恐る恐る中に踏み込む。

カエリ 「なんも流れを感じない」  
ロアル 「だからいないんだって」

カエリ、辺りを物色しながら

ロアル 「勝手にいいの？」  
カエリ 「だめなの？ いないのに」  
ロアル 「……よい」  
カエリ 「折れるの早っ」

ロアルも物色して

ロアル 「うへえー 埃っぽい」

ロアル、空気を手で払う。  
カエリとロアル、それぞれに物色する。  
カエリ、落ちているバッグを開けると、中からノートが出てくる。

カエリ 「ん。なんだろこれ」

ロアル、特にカエリを気にしないで物色を続けている。  
カエリ、開いて読みだす。

ロアル 「ちよつと。油売ってないで探してよ」  
カエリ 「(日記を読んで) 奇妙なことが起こった。そのとき間違いなく、彼

らはいた。本来であればわたしは彼らによって消されているべきだ。  
今までの人々が皆そうであったからそうならなくてはいけないとい  
うものでもないが、しかし、経験的に言えば、わたしはやはり彼ら

に消される、ないしは殺されるべきであったはずだ」

「なに、それ」

「さあ？」

「興味なさそうに）ふう〜ん」

L、次第にカエリにのみ当たる（サス）。

カエリ

「（日記を読んで）ところがそのとき彼ら——イーブはわたしを置いて消え去ってしまった。どこかに行ってしまった。彼らの流れは、小さくなって感知できなくなってしまった。わたしはほっと胸を撫で下ろすと同時に、酷く混乱した。それはやはり通例からすると異常事態であったし、イーブから助かった者、という例をわたしは知らなかった。異常事態が起こったのであれば、それにはそれ相応の原因があるはずだ。何としても、その原因に何としても思い当たらねばならない。次にイーブが来ないとも限らないのだ。そのとき、再び生き残ることができるかどうかは、今のわたしにかかっている。おそらく。そう言えば、イーブが襲来するほんの10分くらい前のことであるが、わたしはイーブの襲来を迎えるにあたっての行動としては、幾分かふさわしくないことをしていた。イーブが来ると分かっていたればこんなことはしなかったのだが、彼らの襲来は予期できないので、勘弁してほしい。そのときわたしは、往年の『空中ファック』シリーズのビデオを見ていた」

ロアル、その辺に落ちている汚い袋をひっくり返している。  
ロアルがひっくり返したバッグから大量の如何わしいVTRが出てくる。

物が落ちる音がする。

L、ロアルにも当たる。

カエリ

「（バッグから出てきた荷物に反応して）え」

ロアルも荷物を見る。

カエリ

「なにこれ」

ロアル

「（拾い上げて）……なんだろう。（パッケージを見て）わ、裸だ」

カエリ

「見して」

ロアル 「はい」  
カエリ 「なんだこれ？ マジックミラー？」  
ロアル 「マジックミラー？ それが？」  
カエリ 「さあ？」

カエリ、パッケージを開ける。

ロアル 「！ 開いた！」  
カエリ 「なんだこれ」

カエリ、DVDをパッケージから取り出して

カエリ 「丸い」  
ロアル 「薄い」  
カエリ 「穴が開いている」

カエリとロアル、顔を見合わせる。

カエリ 「なんだろうね、これ」

ロアル、下に落ちているほかのパッケージも拾う。

カエリ 「ほかのも同じ？」

ロアル、一つのパッケージを開ける。

ロアル 「(DVDを取り出して) 同じだ。丸くて薄くて穴がある」  
カエリ 「なんて？」

ロアル、パッケージを見て

ロアル 「ええと、地上20m空中ファック チョコボール」  
カエリ 「空中ファック！」  
ロアル 「なに」  
カエリ 「空中ファックだって！」  
ロアル 「だから何よ！」

カエリ、先ほどの日記を取り出して

カエリ 「ほら、ここ！ この日記書いた人が、奇妙なことが起こったって！」

カエリ、ロアルに該当の部分を見せて

ロアル 「(読んで) そのときわたしは、往年の『空中ファック』シリーズのビデオを見ていた。性的に興奮した。もちろんわたしのペニスは固く勃起し」

ロアル 「(頭を叩いて) 何言わせるのよ！」

カエリ 「自分で読んだんじゃない」

ロアル 「でなに！ 『空中ファック』がなに」

カエリ 「いや、だからさ」

カエリ、DVDを指す。

カエリ 「性的に興奮っていうのはさ」

ロアル 「うん」

カエリ 「これは、男の人が……」

ロアル 「男が」

カエリ 「そういう目的のために使って？ 見て？ いたんだよね」

ロアル 「そういう」

カエリ 「そういう。つまり、ひとりで(ジェスチャー)」

ロアル 「ああ、そういう行為のために」

カエリ 「うん」

ロアル 「……(思いもよらない) え、どうやって？」

カエリ 「さあ……？」

ロアル 「穴の中に突っ込むの？」

カエリ 「さあ」

ロアル 「したら精神電流が流れてビビビツと」

カエリ 「使い方はちゃんとは分からないけどさ！ 大事なのは、この円盤がマスターベーションを促すものだったってことだと思いの」

ロアル 「マスターベーション(笑う)」

カエリ 「わたしたちはエッチをしているときに、この人はマスターベーシ

ロアル  
カエリ  
「ヨンをしているときに、イーブから助かった」  
「つまり大事なのは」  
「そう、ポイントは」

S、イーブ襲来  
S、流覚

ロアル  
カエリ  
「ええええええええええええええええ。今！？ このタイミングで！？  
ソフィアで！？」  
「……（考え込んでいる）」  
「遥々ブルガリアまで来たのに！？ どうしよう、逃げなきゃ逃げ  
なきゃ逃げなきゃ（てんてこ舞い）」

カエリ、日記とDVDを交互に見て考えている。

ロアル  
カエリ  
「カエリ、逃げるよ……カエリ！ なに落ち着いて」  
「ロアル」  
「なによ！」  
「エッチしよ」  
「は？」

カエリ、自分の服を脱ぎだす。

ロアル  
カエリ  
「ちよちよちよちよちよ（目を逸らす）頭沸いた！？」  
「エッチをすれば、勝てる」  
「はくくくくく？？ バカなこと言ってないで」  
「いいから早くするぞ！」

ロアル、無理やり気持ちよくさせられる。  
L、緩やかに暗転する。  
ロアル、くすぐったくて笑っている。

ロアル  
カエリ  
「こしよばゆいこしよばゆい！」  
「真面目にやって！（攻める）」  
「あつ、あつ（感じる）」  
「そう、そう。わたしのことも攻めて」

ロアル 「これで死んだら、一生恨むからな」  
カエリ 「そうならないように、力を合わせましょう」  
ロアル 「なんだよそれ！ うおうえあああつ、あああつ……」  
カエリ 「ロアルも頑張つて！」

カエリ 「ああ、そこ、そこ、あつあつうああああ」  
ロアル 「あんんああ……」

カエリとロアル、次第にスイッチが入り絶頂に向かう。  
S、イーブが遠ざかる。  
L、暗転

### ○ロアルが運転する車・内（朝）

ロアルが車を運転している。サングラスをかけている。  
カエリ、DVDを抱えている。

ロアル 「なんで持つて帰つて来てるんだよ！」  
カエリ 「お土産お土産。ブルガリア土産」  
ロアル 「日本産だよ」  
カエリ 「え」

カエリ、DVDのパッケージを見る。

カエリ 「Made in JAPAN っつ書いてある」  
ロアル 「そうだもん」  
カエリ 「くうううっ！」  
ロアル 「呑気だねえ。首の皮一枚で助かったって言うのに」  
カエリ 「でも助かったんだからいいじゃない」  
ロアル 「結果論でしょ」  
カエリ 「結果論じゃないもん、根拠あるもん。わたしのおかげ」  
ロアル 「はいはい。どうもありがとう」  
カエリ 「感謝が籠つてない。絶対エッチしてたから助かったんだよ」  
ロアル 「絶対？」  
カエリ 「だってあの日記のマスターベーションも、エッチも、要は性的に興奮してるってことでしょ？ 重要なのは、そこなんだよきつと」



ロアル 「性的に興奮していれば、イーブから助かる？」

カエリ 「おそらく」

ロアル 「なんで」

カエリ 「なんで？」

ロアル 「なんで、性的に興奮してると、イーブから助かるの？」

カエリ 「それは……分かんない」

ロアル 「それが分かれば、安心してエッチできるんだけど」

カエリ 「そうだけど、でも、実際に上海でもビシユケクでもソフィアでも、

エッチして助かったじゃない。帰納的に考えて、エッチするとイーブから逃げられる、と言うのは限りなく事実に近いことなんじゃないかと思う」

ロアル 「ふうむ、よろしい。理屈はどうであれ、今はそういうことにしておきましょう。なぜなら」

カエリ 「なぜなら」

ロアル 「目的地が見えてきたから」

カエリ 「なに！」

ロアル 「凱旋門です！」

カエリ 「がいせんもん！ 聞いたことある！」

ロアル 「ほら」

カエリ 「おお……あれが……芸術の都・パリス」

ロアル 「In」

### ○西ヨーロッパの集落（パリ）

M 「オーシャンゼリーゼ」

S、ブレーキ

カエリとロアル、車を降りる。

二人でパリの街並みを愉しんでいる。

ふと、ロアルにだけ音が聞こえてきて……

M、讚美歌

ロアルは一人ふらふらと歩きだす。

ロアル 「音が聞こえる」

カエリ 「え？」

ロアル 「こっちから」

カエリ 「ちよつと。ロアル。エツフェル塔は？ベルマーク宮殿は？」  
ロアル 「今度ね」  
カエリ 「ええ〜」

ロアル。教会にたどり着く。  
カエリ、渋々着いて行く。  
L、変化

カエリ 「これは……？」  
ロアル 「教会、かな」  
カエリ 「入っていいの？」  
ロアル 「音がするから」  
カエリ 「なによ、音つて！聞こえないよ」  
ロアル 「行くよ」  
カエリ 「ええ……」

S、扉を開ける。  
ロアル、入る。  
カエリも恐る恐る後に続く。

### ○同・宗教的施設・内（夕）

暗く、冷たい空気が淀んでいる施設。  
ロアル、毅然として入る。  
カエリ、恐る恐る。  
S、扉が閉まる。  
扉が閉まるのと同時に、Mが止まる。

カエリ 「ロアル」  
ロアル、音が止まったことに気が付き、辺りを見回す。

カエリ 「ねえロアル」  
ロアル 「……」  
カエリ 「ロアル！」

V、イーブのイコン。  
イーブは、不可解で見たことがないような不可思議な形。  
床にはヴェールやロザリオのような聖具が置かれている。  
カエリがイコンを見ている。  
ロアルは気が付いていない。

カエリ 「あれ」

カエリ、イコンを指す。

ロアル 「え？」

ロアル、カエリが見ているものを見る。

カエリ 「なに……これ……？」

ロアル 「……」

「しかもこれ、この状況……。ついさっきまで、……律儀にみんな  
でお祈りしてたみたいじゃない」

ロアルはイコンに釘付けになっている。

カエリ 「みんなでこの理解しがたいイコンに祈っている真つ最中に、消え  
ちやつたみたい」

「……」

カエリ 「やっぱりイーブかな」

ロアル 「イーブ……」

カエリ 「ロアル？」

「どういうことだ……」

「え」

ロアル 「あのイコン……に書いてある」

カエリ 「読めるの？ 字」

ロアル 「旧フランス語」

「なんて書いてあるの？」

ロアル 「うん……」

「なんて書いてあるのよ」

ロアル 「イーブを讚えよ」

カエリ 「え」  
ロアル 「イーブの導きに従う者は、救われるであろう」  
カエリ 「イーブの導き……？」  
ロアル 「うん」  
カエリ 「救われる？」  
ロアル 「うん」  
カエリ 「イーブを讃える？」  
ロアル 「そう書いてある」  
カエリ 「じゃあ……あのイコンは」  
ロアル 「たぶん、イーブだ」

カエリとロアル、イーブのイコンを見つめる。

カエリ 「イーブって、見えるの……？」  
ロアル 「分からない。あるいは、ここの集落の人たちには見えたのかもしれない」  
カエリ 「あんな気持ちの悪そうな」  
ロアル 「見えていたにしろいないにしろ、ここはどうやら、イーブを神として崇める宗教の施設みたいだ」  
カエリ 「どうしてイーブが神なの」  
ロアル 「分からない」  
カエリ 「だってイーブは、わたしたちを殺すんだよ？」  
ロアル 「分からないよ、わたしだって」

M、讚美歌

カエリにだけ讚美歌が聞こえる。

カエリ 「なに……これ」  
ロアル 「カエリ？」  
カエリ 「なにこれ」  
ロアル 「どうしたんだよ」  
カエリ 「聞こえないの!？」  
ロアル 「え…… 何が」

カエリ、後ずさって

カエリ 「やだ、気味が悪い……」

S、缶が跳ねるような音  
カエリとロアル、びっくりして外を向く。

カエリ 「誰かいるの？」

S、唸るような風の音

ロアル 「風だ」

カエリ 「え？」

ロアル 「ただの風だよ」

S、さっきの缶の音

ロアル 「風が強くなってる」

カエリ 「急に？」

ロアル 「分からない」

カエリ 「怖い」

M、讚美歌が大きくなる。

カエリ 「いや……やだ」

カエリ、ダツシユで逃げる。

ロアル 「カエリ！ 待って」

ロアルもカエリの後を追う。

L、暗転

### ○ロシア西部の集落（サンクト・ペテルブルグ）・天文台・内（夜）

M、「カチューシャ」（ロシア民謡）

S、イーブの襲来

S、流覚

蜜事に励んでいる二人。  
S、イーブが遠ざかる

夜空に、ひときわ大きく輝く赤い星。天体としてはとても大きい。

ロアル  
「行っただか」

カエリ  
「うん」

すくつと蜜事をやめる二人。

ロアル  
「無駄のないセックスにだいぶ慣れてきたな」

カエリ  
「助かるためのエッチ」

ロアル  
「性的興奮をしてさえいればイーブから助かる、か」

カエリ  
「言っただでしょ？」

ロアル  
「なんでなんだろう」

カエリ  
「理屈は分かんないよ。イーブに聞かないと」

ロアル  
「分かんないことだらけだ」

カエリ  
「ここがどこなのかもね」

ロアル  
「サント・ペテルブルク」

カエリ  
「聞いたこともない」

ロアル  
「世界地理を勉強しなさい」

カエリ  
「いーだ！」

「もつというと、ここはサント・ペテルブルクにある国立の天文  
台だ」

カエリ  
「テンモンダイ！」

ロアル  
「初めて来た？」

カエリ、辺りをきよろきよろと見回して

カエリ  
「うん。初めて。これが、ボウエンキョウ、ってやつ？」

ロアル  
「そう。それで遠くを見る」

カエリ、望遠鏡に近づいて

カエリ  
「これ、どうやって使うの？」

ロアル  
「さあ？」

カエリ 「さあつて」  
ロアル 「わたしだつて分からないよ。望遠鏡の使い方なんて」  
カエリ 「なくんだ」

カエリ、適当にいじる。電源らしきボタンを発見。

カエリ 「なんだろこれ」  
ロアル 「どれどれ？」  
カエリ 「スイッチかな」

カエリ、入れてみる。

S、起動する音  
カエリ、キョロキョロ。

ロアル 「押しちゃったの？」  
カエリ 「押しちゃった」

ロアルもキョロキョロする。

ロアル 「大丈夫かよ、何のスイッチ？」  
カエリ 「さあ」  
ロアル 「さあつて！ 急に爆発でもしたら」

S、流覚言語  
カエリにだけ感じられる。

声 「呼ばれて飛び出て」  
カエリ 「わっ！」  
声 「ジャジャジャジャーン」  
カエリ 「ホントに現代！？」  
ロアル 「流れか」  
カエリ 「うん」  
声 「おいおいおいおい、マスター！ 久しぶりじゃねえか！ おい、なにやってたんだよ、こう見えてもオイラは寂しかったんだぜ……つてあら、マスターじゃねえ？」  
カエリ 「マスター？」

ロアル  
カエリ 「つて言ってるの？」  
「なんか……すごいうるさい流れが」  
声 「なんだなんだ、マスターかと思ったら、この流れは、小っちゃな  
お嬢ちゃんじゃねえか？ マスターかと思っただぜ」  
カエリ 「お嬢ちゃんとか言ってくる」  
ロアル 「どんな流れだ」  
声 「お嬢ちゃんと呼ぶのもなんだな。お嬢ちゃん、名前は」  
カエリ 「わたしは、カエリ。上海に住んでいるの」  
声 「上海！？ おいく！ 遠いところから遙々よく来たなあ、大した  
もんだ！ はっはっは！ お嬢ちゃん、見かけによらずタフだなあ  
〜」  
カエリ 「見えてないでしょうが。お嬢ちゃんと呼んでるし」  
声 「（聞いていない） 気に入った！ オイラはジエゴロって言うんだ、  
よろしくな」  
カエリ 「（ロアルに） なんか気に入られた」  
ロアル 「なんだそれ」  
カエリ 「よろしく、ジエゴロ」  
声 「ああ、よろしくな！ お嬢ちゃん」  
カエリ 「カエリ！」  
「一人で突っ込んでる」  
ロアル 「コイツ全然名前覚えてくれない」  
カエリ 「いいから、いつから天文台の人たちがいないのか聞いてくれよ」  
カエリ 「あん、分かった。ねえ」  
声 「おう、どうしたお嬢ちゃん？」  
カエリ 「あなたは、いつから独りぼっちなの？」  
ロアル 「めっちゃストレートに聞くなあ」  
カエリ 「いいでしょ別に。ただのFCよ」  
声 「おう、そいつぁいい質問だなあ……最後にオイラが眠ったのは、  
今から1437日前だ」  
カエリ 「1437日」  
声 「それからマスターはぶつつりとオイラを起こさなくなっちゃった」  
ロアル 「4年もずっと独りだったんだな」  
カエリ 「4年もずっと独りだったんだね」  
ロアル 「パクるなよ」  
声 「そうだ。ずっと、独りだった」  
カエリ 「ジエゴロ」



声 「やっとお嬢ちゃんが、起こしてくれた」  
カエリ 「偶然スイッチ見つけただけけど」  
声 「まあそんなことはいいさ！ オイラたちは出会った！ 出会い方なんてどうでもいい。出会ったこと、それが重要だ！ そしてオイラはお嬢ちゃんに気に入っている。実はこれも重要だ。さあ、何でも聞いてくれ！」  
カエリ 「そうだ！ 知りたいことが……。あれ？ 何知りたかったんだっけ」  
ロアル 「おい！」  
カエリ 「なんかこのFCに吞まれちゃって」  
ロアル 「しつかりしてよ。イーブについて！」  
カエリ 「ああ、そうだそうだ」  
ロアル 「緊張感ないなあ」  
カエリ 「ねえ、ジエゴロ」  
声 「どうした！ お嬢ちゃん！」  
カエリ 「(遮って) イーブについて知っていることを教えて」  
ロアル 「質問が広い」  
声 「イーブ。イーブか」  
カエリ 「そう、イーブ。知ってるでしょ？ 地球中で、人類の捕獲？ 拉致？ 殺戮？ を行っている地球外生命」  
声 「ああ、知ってるさ、もちろん知っている。しかし……」  
カエリ 「しかし？」  
声 「ここは、お嬢ちゃん、天文台だ」  
カエリ 「天文台」  
ロアル 「どう、なにか分かったって？」  
カエリ 「全然」  
声 「オイラのマスターたちは、日夜惑星を眺めて、その動き方や、その成分を記録しているんだ」  
カエリ 「イーブだつて、どこかの星から来ているんじゃないの？」  
声 「んん……そうなんだが、イーブについては、オイラのデータベースにも目ぼしい記憶がないんだ」  
カエリ 「記憶がない」  
ロアル 「記憶がない？」  
カエリ 「うん」  
声 「厳密に言うと、記憶を照会できない、だ」  
カエリ 「どういうこと？」

声 「残念なんだが、お嬢ちゃん、こればかりは、ああ……そのつまり、色々なデータにロックがかかっているんだ」

カエリ 「ロック？」

声 「ああ……オイラのマスターじゃないと、開けることができない」

カエリ 「ええ、そんなあ〜」

声 「済まねえなあ、お嬢ちゃん」

カエリ 「つまり、イーブについてのデータはあるにはあるけど、わたしに示せるものはほとんどないってこと？」

声 「ああ。そういうことになる」

カエリ 「逆に言えば、イーブのデータに関してはそれだけ秘密が多いってこと？」

声 「そうとも言えるだろう」

カエリ 「どうして秘密にするの」

声 「すまん、お嬢ちゃん。そのワケについては、オイラは全く分からない」

ロアル 「カエリ、いいよ」

カエリ 「どうして」

ロアル 「データが出せないとFCが言うなら、どうしたってデータは出てこない」

カエリ 「諦めるの？」

ロアル 「諦めるのも何も、無理じゃないか。FCだぞ」

カエリ 「パリでのことを思い出してよ！ あんなわけわかんないものを見て」

ロアル 「そうだけど、FCが開示できないって言ってるんだ。人間相手じゃないんだから」

カエリ 「(ジエゴロに) どうして秘密なの！？ 開示してくれたっていいじゃない！ もう今さら出し惜しみしたって仕方ないじゃない！ わたしたちは切迫してるの、情報が欲しいの！」

声 「すまねえお嬢ちゃん……。どうしたってオイラはこの情報は、マスター以外に開くわけにはいかねえんだよ。ごめんな」

カエリ 「何言ってるの？」

声 「お嬢ちゃん？」

カエリ 「カエリ？」

ロアル 「あなたのマスターはもういないじゃん！ 1437日もあなたのことを放っておいて。イーブに殺されたに決まってる」

ロアル 「そんなこと言っても仕方ないだろ！」

声 「お嬢ちゃん」

カエリ 「だから、教えてくれたっていいじゃない。そんな秘密、抱えてるだけ無駄じゃない！ ジェゴロのマスターは、もう帰って来ることはない。でもわたしたちは生きてる、イーブから生き延びてる」

声 「(遮って) 聞き捨てならねえなあ、お嬢ちゃん。確かに、オイラのマスターは1437日もの間、オイラに会いに来ないさ。もしかしたらイーブに消されたのかもしれない、殺されたのかもしれない。でもなお嬢ちゃん、だからってオイラはマスターとの約束を破って、それなら秘密を守っていても仕方がないからお嬢ちゃんに見せましよう、ってことにはならないんだ。マスター以外に見せてはいけない記憶がある。マスターがオイラに守ってほしいとロックを掛けた記憶がある。それをマスター以外に見せないのがオイラの役目さ。たとえマスターがオイラに1437日間会いに来なかったとしても、分かってくれるよな、お嬢ちゃん？」

カエリ 「分かるけどお」

ロアル 「めっちゃ説教食らってるじゃん」

声 「な、だからお嬢ちゃん。イーブのロックされた記憶は、開示することができねえんだ。すまねえ、分かってくれ」

カエリ 「……分かったよ」

声 「他のことなら、答えてやれるかもしれないからよ！ な！」

カエリ 「他って」

声 「もちろん、天体に関して、という限定付きだがな。なんてったってここはサンクト・ペテルブルクの誇る天文台だ」

カエリ 「ふうん。……じゃあ、FOP188の綺麗な画像、ない？」

ロアル 「それカエリの趣味じゃん」

声 「おお、あれか！ あの赤い星だろ。あれならマスターも、ここんとこよく調べてるみたいだったぜ！ なんか、チームを作ってたな！」

カエリ 「へえ、そうなんだ」

声 「お嬢ちゃん、あの星が好きなのかい？」

カエリ 「好き。見ると、なんか落ち着く」

声 「なるほどなあ。オイラもあの星が好きだ。あの星は、美しい。：

……おや？」

カエリ 「どうしたの？」

ロアル 「どうしたの？」

声 「おかしいなあ」

カエリ 「ジェゴロ？」

ロアル 「なんだって？」

カエリ 「分かんない」

声 「消えている……？」

カエリ 「え」

声 「オイラの記憶から、EOPi-88に関する記憶の大部分が、無くなっている」

カエリ 「え？」

声 「1451日前……マスターがオイラを最後に起こした14日前に、マスター自ら、オイラの持つEOPi-88の記憶を消している」

### ○北アメリカの集落（ジュノー）・車（夜）

M、イヌイットの音楽

S、イーブ襲来（遠方）

星空。

ひとときわ大きく輝く赤い星・EOPi-88。いつもよりひとときわ大きく煌めいている。

布団にくるまって、車の中からカエリとロアルが見上げている。

S、流覚

S、イーブ襲来（近づいて来る）

ロアル 「来る」

カエリ 「うん」

カエリとロアル、見つめて

ロアル 「カエリ」

カエリ 「ん」

カエリとロアル、キスをする。  
最初は軽く、次第に強く。

カエリ 「あ、だめかも……それじゃまだ」

ロアル 「もつと？」

カエリ、頷く。  
ロアル、カエリを押し倒しながら耳を触ったり、色んな部位に触れていく。

カエリ 「あああつ……」

S、イーブが遠ざかる。

ロアル、まだ続けている。

カエリ 「ああんああ……」

イーブの音が完全に消えて、ロアル、やめる。

カエリ 「行ったね」

ロアル 「行ったね」

ロアル、カエリから離れる。

カエリ 「キスでも大丈夫なんだね」

ロアル 「うん。昂ってさえいれば、おそらく」

カエリ 「あ……いててて（下腹部をさする）」

ロアル 「大丈夫？」

カエリ 「あうんう。肩貸して」

カエリ、ロアルにもたれかかる。

ロアル 「カエリってさあ」

カエリ 「うん」

ロアル 「重いよね」

カエリ 「え、ごめん（ロアルから離れる）」

ロアル 「あ、違う違う違う。これ、これ（指で下腹部を指す）」

カエリ 「あー、なんだ。わたしかと思った」

ロアル 「そんなこと言わないよ」

カエリ 「あ、痛い痛い痛い」

ロアル 「おお、つらいなあ。いつから？」

カエリ 「昨日の夜」

ロアル 「あゝ」

カエリ 「ロアルはさ、全然だよね」

ロアル 「そうね。全然軽いね」

カエリ 「羨ましいゝ、ズルゝズルゝ」

ロアル 「こればかりはなんとも」

カエリ

「このシステムさあ、効率悪いよねえ。もっと男みたいに、耐えず作られてて、いつでも出せればいいのにさあ。最初っから作っておくから、旧くなったのは捨てる、みたいな要らない儀式があるんでしょ？ あゝイタタタタタ」

ロアル 「おお、よしよし……」

カエリ 「これ意味あるのかなあ？」

ロアル 「ドユコト」

カエリ 「もうわたしたちしか残ってないんじゃない？ 地球。さすがに。

わたしたち二人だけしかさ。そしたらさ、子どもなんかできないじゃん。無理じゃん。もう絶滅するしかないじゃんわたしたち。だから、こんな現象、無意味くない？」

ロアル 「人類最後の二人」

カエリ 「早く止まってほしいゝゝ。いたゝい。意味なゝゝい」

ロアル 「人間は不便だね」

カエリ 「わたしを慰めろゝ（ポカポカ殴る）」

ロアル 「オスメスがいないと増えないなんて」

カエリ 「慰めろゝ（ポカポカ殴る）」

ロアル 「痛い痛い痛い！」

カエリ 「寝る！」

カエリ、立ち上がり

カエリ 「じゃあね！」

ロアル 「急！」

カエリ、車から降りてハケる。

カエリ声 「イーブが来たら起こしてね」

ロアル 「え、うん」

カエリ、ひよっこり顔を出して

カエリ 「人間が来ても、教えてね」

ロアル 「もちろん」

カエリ 「おやすみ」

カエリ、再びハケる。

ロアル 「おやすみ」

ロアル 「おやすみ」

夜空に輝く赤い星とロアル。

ロアル、トートバッグのある所まで行き、そこからノートを取り出す。

ロアル 「父さんの予言は当たってたみたいだ」

ロアル 「カエリ……。ごめん。これ日記じゃない。父さんの、記録なんだよ。もちろんとうの昔に、イーブに殺されてしまったけどね」

ロアル、ノートを開いて

ロアル 「(読みながら) FOP1-88。西暦 8023 年、突如として見つかった高速の惑星。公転周期不明。質量、太陽のおよそ 5,000～10,000 倍。その軌道、地球の軌道と衝突すると推測される。地球は、当該惑星の大気圏突入時の圧縮断熱により燃え尽きる。衝突の時期は、西暦 8037 年、10 月 16 日午前 3 時から、翌 10 月 17 日 22 時までの間と思われる」

ロアル、ノートを閉じて

ロアル 「現在、10 月 16 日 20 時 45 分」

FOP1-88 がみるみる距離を詰めて大きくなっている。  
ロアル、車から降りる (S、車のドア)。

ロアル、カエリを起こしに行く。

ロアル声 「カエリ、カエリ。起きて」  
カエリ声 「なに」  
ロアル声 「ドライブ行こう」  
カエリ声 「はあ？」  
ロアル声 「ね、起きて」  
カエリ声 「なに、イーブ？」  
ロアル声 「来てないよ」  
カエリ声 「ひと？」  
ロアル声 「来てないよ」  
カエリ声 「なに」  
ロアル声 「ほら、ドライブ」  
カエリ声 「ええ」  
ロアル声 「ほらもう最後だから」  
カエリ声 「(寝ぼけている) 最後？」  
ロアル声 「うん。だから、行こう」  
カエリ声 「うくん」

ロアル、寝ぼけているカエリを引っ張り出してくる。  
カエリ、大きな赤い EOPi-88 を見て

S、EOPi-88 の接近

カエリ 「赤い」  
ロアル 「うん」  
カエリ 「月？」  
ロアル 「あんなに赤いのに？」  
カエリ 「なに」

ロアル、質問には答えず、車に乗り込む。  
S、車の扉の開く音

ロアル 「乗って (手を差し出す)」  
カエリ 「うん (まだ寝ぼけている)」

カエリ、手を出す。



ロアル、その手を挿んで、カエリは車に乗り込む。  
S、車の扉が閉まる

○ロアルが運転する車・内々外（夜中）

S、車が発進する。

ロアル 「出発！」

カエリ 「はい」

カエリ 「どこ行くの？」

ロアル 「どこでも」

カエリ 「何しに行くの？」

ロアル 「なんでも」

カエリ 「ふうん」

ロアル 「どっか行きたいところある？」

カエリ 「うーん……みんながいるとこ」

ロアル 「いいねえ。したいことは？」

カエリ 「お母さんのハンバーグ食べたい」

ロアル 「分かる」

カエリ 「月、赤いねえ」

ロアル 「月じゃないって」

カエリ 「ねえ」

ロアル 「ん？」

カエリ 「なんで？」

ロアル 「なにが」

カエリ 「なんでドライブ？」

ロアル 「ああ。最後だから」

カエリ 「最後？」

ロアル 「最後」

カエリ 「何、最後って」

ロアル 「最後だから言うんだけどさ」

ロアル 「ありがとうね」

カエリ 「何、急に」

ロアル 「カエリいて、良かったなあって」

カエリ 「こわいこわいこわい」

ロアル 「怖いってなんだよ」

カエリ 「怖いでしょ」

ロアル 「わたしたちつてさあ、なんで生き残っちゃったんだろうね」

カエリ 「ああ」

ロアル 「みんなと一緒に、連れ去ってほしかった」

カエリ 「つて思うときもあったよ」

ロアル 「うん」

カエリ 「ロアルは、どうして生き残ったの」

ロアル 「……運が悪かったから」

カエリ 「悪かった」

ロアル 「そう」

カエリ 「その気持ち分かるかも」

ロアル 「わたしはそのとき、ずっとアフリカにいて」

カエリ 「アフリカ？ どうして」

ロアル 「お父さんの手伝いで」

カエリ 「お父さん？」

ロアル 「地質学の研究者だったの。……イーブがどうして人間を消すのか、イーブからどうやったたら逃げるかができるのかを調べていた。まあわたしがやってたことは今と同じなんだけどね。生き残りを探してた。アフリカ大陸でね。お父さんは九州に残って、わたしひとりで、アフリカに赴いた」

カエリ 「そうだったの」

ロアル 「でも帰ったときには、福岡のわたしの集落は……」

カエリ 「イーブに襲われた後だった？」

ロアル、頷く。

ロアル 「ごめんね、辛気臭くて」

カエリ 「ううん」

カエリ 「わたしも、思ったよ」

ロアル 「なんで、わたしも一緒に消してくれなかつたんだろうって」

カエリ 「お父さん、お母さん、お兄ちゃん、ロダ、ステラ、カウル、バアト。みんないなくなっちゃった。なのに、わたしだけ生き残った。何もできないのに」

ロアル 「わたしたち、二人ぼっちだね」  
カエリ 「そうみたいね」  
ロアル 「この広い地球の中で」  
カエリ 「アフリカには？ いた？」  
ロアル 「(首を振って) ひとつこ一人」  
カエリ 「そう」  
ロアル 「オーストラリアも、南米も、マダガスカルも、誰もいない」  
カエリ 「本当に二人だけだ」  
ロアル 「そして、誰もいなくなった」  
カエリ 「縁起でもない」

カエリとロアル、笑う。

ロアル 「カエリ」  
カエリ 「ん？」  
ロアル 「生きていてくれてありがとう」  
カエリ 「それは、わたしも。ありがとうだよ。来てくれて、ありがとう」  
ロアル 「ひとりぼっちじゃなく、生きられたよ」  
カエリ 「わたしも」  
ロアル 「カエリは、強くなったね」  
カエリ 「ロアルは、弱くなったね」  
ロアル 「気を張ってたから、最初は」  
カエリ 「なんでよ」  
ロアル 「人見知りだもん。張るよ、気くらい」  
カエリ 「わたしはロアルが気を抜いていったから、逆に張っちゃったよ」  
ロアル 「ふふ」

ロアル、車を止める。  
S、車の停止

ロアル 「よし」  
カエリ 「？」  
ロアル 「着いた」  
カエリ 「ここ？」  
ロアル 「ああ」  
カエリ 「みんなに会える？」

ロアル 「ああ」  
カエリ 「お母さんのハンバーグは？」  
ロアル 「ああ」  
カエリ 「そか」  
ロアル 「ああ」  
カエリ 「なら良かった」  
ロアル 「(EOPi-88を見て)カエリ、見て」

カエリ、今やとんでもない大きさになっている赤い EOPi-88を見て

カエリ 「ああ……赤い」  
ロアル 「一緒に生きてくれて、ありがとう」  
カエリ 「ロアル」  
ロアル 「一人で死ぬのは、イヤだよ」  
カエリ 「大丈夫だよ、ロアル。わたしが一緒にいるから」  
ロアル 「うん」

ロアル、カエリに抱き着く。  
カエリは優しくロアルを包み込む。

ロアル 「楽しかったよ、カエリに会ってからずっとずっと」  
カエリ 「わたしもだよ」  
ロアル 「一緒に色々、行けて」  
カエリ 「わたしも。全部、楽しかったから。嬉しかったから」

S、地球が崩壊し始める。  
カエリとロアル、接近する EOPi-88を見つめて

ロアル 「星が」  
カエリ 「降って来る」

二人、強く抱き合う。  
S、地球が崩壊する。  
S、流覚

ロアル 「え？」

カエリ 「あ」

S、イープに拉致された地球人の流れ

ロアル 「いる……あの星に」

カエリ 「お父さん、お母さん？ お兄ちゃん。みんな……」

ロアル 「みんな……」

S、イープの流れ

カエリ 「ああ……」

ロアル 「イープだ」

カエリ 「イープ」

ロアル 「あの星は」

カエリ 「イープの星だったんだ」

カエリとロアル、互いに見て笑う。

カエ・ロア 「だったら連れてって欲しかった！」

カエリ 「お父さん、お母さん、お兄ちゃん！！」

ロアル 「お父さん！ お母さん！」

カエリ 「ロアル」

ロアル 「カエリ」

S、地球が燃える。

終わり